

平成30年度 県立並木中等教育学校自己評価表

目指す学校像	1 様々な体験を通して広く人間教育を行う学校 2 筑波研究学園都市の一角に位置するという地域性を生かし、大学や研究機関と連携して科学教育を行う学校 3 外国からの研究者・留学生との交流や海外語学研修などを通して、国際理解教育を行う学校		
昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成状況
<p>開校10年を迎え、「より高い教育水準・より豊かな教育活動をめざして」をテーマとする第2ステージも半ばを過ぎた。アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践が浸透してきた。R80による「振り返り」と「再構築」をさせることにより、生徒の論理的な表現力が高まってきている。</p> <p>より豊かな教育活動をめざした成果として、科学分野や芸術分野の各種コンクール等において優秀な成績を上げる生徒がでた。さらに、SSH第2期目の指定を受け、理数探究のカリキュラム開発と充実を行っている。</p> <p>中等教育学校の特性を生かすためのカリキュラム・マネジメントを行い、6年間を見通した校内体制の整備を進めていきたいと考える。また、人間教育の充実についても、課題として留意していきたい事項である。生徒の人権を大切に丁寧な指導を心がけていきたい。</p>	1 意欲ある学校風土の醸成	○新しい時代に必要となる資質・能力を育成する。 ・「アクティブ・ラーニング」の推進により「論理力」を育てる。 ・ICTの効果的活用を工夫し、生徒の思考力・判断力・表現力等の能力を育てる。 ・縦割り活動を通して、生徒が協働して学ぶ態度やリーダーシップを育てる。	A
	2 志高く、進路実現に取り組む生徒の育成	○体験活動を充実し、6年間を見通した体系的なキャリア教育を展開する。 ○生徒が自らの可能性に挑戦する進学指導を実践する。	A
	3 SSH事業第2期目の推進	○学校設定科目「理数探究」を中心としたカリキュラム開発と充実を図る。 ○地域連携、高大連携による探究力・論理力の育成を図る。	A
	4 6年間を見通した校内体制の確立	○6年間の教育活動の体系化を図り、内容を精選する。 ○カリキュラム・マネジメントにより教育活動を精選し、校内体制を確立する。	A

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
1 校務運営部 (教務)	SSH2期目の展開と次期学習指導要領を念頭に置いた教育課程編成、授業時間の確保と行事の調整を行い、学校としての体制を確立する。	SSH関連の講演会等を総合的な学習の時間に位置づける等、年間を見通した計画的な授業時間確保を行うため、学校行事や年次行事の調整を行う。	A	A	生徒の多様な学びのための行事の精選と、授業時間の確保を継続
		「理数探究」の授業を効果的に運営するための行事・日課等の計画や調整を行う。	B		「理数探究」における中間発表会、成果報告会を踏まえた授業時間数の確保
		SSH2期目の目的を達成するため、教育課程全般を見直し、学校設定科目の新設・改良を十分検討し、学校としての方針を踏まえた体系的なカリキュラム開発を推進する。	A		学校設定科目と医学コース設立を踏まえた、総合的なカリキュラム開発
	行事の精選と授業時間の確保に努め、生徒の可能性を引き出す質の高い授業が展開できるような学習環境・システムを整備する。	計画的な運用により現行のA週B週C日課システムの利点を最大限に活かし、授業時間の偏りを減らすための曜日変更や行事の調整を行い、バランスのとれた学習進度を維持する。	A	A	A, B, Cパターンによる年間を見通した時間割構成を行い、授業時間の確保を継続
		教務として授業変更を管理し、授業振替を継続して推進する。1時間の授業にこだわることで、生徒・職員ともに「授業を大切に」意識の徹底を図る。	A		非常勤講師への連絡体制の徹底による、突発的な授業変更への対処
		定期・実力テストの在り方を検討していく。各教科・年次からの要望も取り入れ、結果が効果的に生徒に還元され、授業で培った力がより正しく評価されていくように、テストの在り方や内容を十分検討していく。	B		部活動の対外試合によるテスト欠考者の増加への対応
	カリキュラム・マネジメントにより、アクティブラーナーを育成するための6年間を見通した校内体制の充実を図る。	アクティブ・ラーニングやICTの活用を取り入れたシラバスを作成し、生徒のアクティブラーナーとしての自覚を高め、意欲を持った学習計画の立案を促す。	A	A	アクティブラーナー育成のための、計画的かつ創意工夫ある授業計画の立案
		観点別学習状況評価について理解を深め、生徒個々の学習方法のチェックに還元できる評価方法を研究する。大学入学共通テストに関する情報収集、共有に努め、授業への反映を図る。	B		後期課程における要録及び通知票の観点別学習状況評価表記への対応
		保護者や地域に対するアンケートを実施し、学校外からの意見も取り入れていく。	A		アンケートでのマイナス評価項目への改善策構築
	(総務)	本校の目指す生徒像及び教育活動の活性化を念頭に置いた選抜を行う。	入学者選抜内規を検討する。	A	A
効率的かつ正確な入試事務処理が行えるよう運営計画の工夫改善を図る。学校委員会担当者の負担軽減と業務の細分化を図る。			B	ヒューマンエラー発生への的確な対処を継続	
多様な手段により、本校教育活動についての広報活動を充実させる。		生徒が主体となり生徒目線での学校説明会を企画する。日頃のアクティブ・ラーニングの実践や研究を生かした学校公開等の企画・立案を検討する。	A	生徒主体の発表を中心にした説明会を継続	
		生徒の躍動感をアピールする学校案内パンフレットやリーフレットを作成する。	A	生徒の活躍する写真を多数掲載し、躍動感あふれるパンフレットの作成	
		直感的でわかりやすいHPの構成やデザインを検討するとともに、本校の教育活動を外部に発信するツールとして積極的にHPの更新を図っていく。	A	生徒の活躍に関する情報を積極的に発信していくための更新継続	
儀式的行事を円滑に運営する。		始業式、終業式、入学式、卒業証書授与式、修了式等の企画・運営を円滑に行う。	A	生徒の参加意欲を高める企画・運営の継続	
		校内の放送機器等の整備拡充を行う。	B	映像を伴う放送集会企画立案と、老朽化した機器の更新	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
(渉外)	渉外活動の充実と会員同士の親睦を図る。	PTA総会、本部役員会及び合同役員会を企画・運営する。	A	A	計画的な運営による、参加者数の維持増加
		県高P連及び県西高P連との連携・協力を図る。	A		他校との積極的な情報交換による連携継続
		年次委員会、広報委員会、研修委員会、生徒指導委員会、支部会を開催する。	A		機能的な組織運営のための情報共有を継続
		かえて祭(文化祭)、ウォークラリー等、学校行事への保護者の参加協力を積極的に呼びかける。	A		案内の周知による、参加者数の維持増加
2 企画研究部	6年間を見通した「理数探究」の指導体制の確立を図る。	生徒一人一人の理数探究の充実、及び指導する教員の指導力の向上を図り、年間を通して「理数探究」の授業の充実を図り、6年間を見通した「理数探究」の指導体制の確立を図る。	A	A	ゼミ活動におけるファシリテーションの促進
	SSH事業第2期目の推進	中高一貫教育を活かした探究力・論理力を育成するカリキュラムの開発と教材・指導法の実践的研究の充実を図る。	A		中間評価へ向けた準備
	県内初のユネスコスクールとして国際理解教育の充実を図る。	ユネスコスクールとして日々の授業や様々な国際的な体験を通じて次代の日本・世界の発展を担う「人間力」を備えたグローバルリーダー育成を図る。	A		学校全体のSDGsに対する意識の醸成
(探究)	・理数探究・課題探究Ⅲの運営方法を改善発展 ・前期課程ミニ課題探究の運営方法の系統化	① 理数探究Ⅰ、Ⅱ・課題探究Ⅲのカリキュラム開発を行う。	A	A	ルーブリックを用いた評価方法の確立
		② 探究ノートの開発を行う。	A		探究ノートの改訂
		③ 前期課程ミニ課題探究のカリキュラム開発を行う。ミニ課題探究の運営方法を系統化し、6年間の一貫した理数探究指導体制を確立する。	A		年次主任及び担当教員との連携を強化し、必要に応じてスクラップ&ビルドを行う
(SSH)	・SSH第2期の中間評価に向けての、研究開発課題に対する実践的な取組と評価 ・探究力、論理力を育成するカリキュラム開発 ・地域連携・高大連携による探究力・論理力育成システムの構築	① 探究力・論理力を育成するカリキュラム開発を行う。(理数探究基礎、理数探究、論理国語、SS理科科目、数理科学A・B)	A	A	学校設定科目の内容の充実
		② 地域連携、高大連携による探究力、論理力育成システムを構築する。(つくばサイエンスフロント、つくば市の社会問題ミーティング、CSTレーニング)	A		学校組織全体による運営の確立
		③ 科学技術系人材育成を図る。(医学ゼミ、科学研究部、科学の甲子園およびジュニア、科学オリンピックの活動支援)	A		各内容のさらなる充実
		④ 他校への普及活動に力を入れる。(授業公開、SSH通信)	A		授業公開の範囲を全国に拡大できるかの検討
		⑤ 事業の分析・評価を行う。	B		各事業を通じた評価方法の確立
(SGS)	・国際理解教育・国際交流など特色ある学校づくりの取組 ・県内唯一の公立学校ユネスコスクールとしてESD教育への積極的な取組と普及	① SSH事業とリンクをさせた国際理解教育を充実させる。例:英語科と他教科のクロスカリキュラム実施やICT活用、アクティブ・ラーニング等	A	A	海外の優秀な理数系の高校生との交流の継続
		② キャリア教育の視点や、外部機関(JICA・土木研究所・産業技術総合研究所・企業等)との連携を踏まえて、各年次に最もふさわしい国際理解教育に関わる行事を選択し、当該年次に提示する	A		国際教育の中心となる生徒主体の委員会的組織の構築

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
4 学校生活部 (生徒指導部)	基本的生活習慣を育成し、他人との協調性を養い、自己実現を目指す。	全職員の共通理解と指導を徹底する。	A	A 前後期職員の共通理解と6年間一貫指導 上級生が下級生の見本・手本になるよう自覚化 継続的かつ計画的に活動の促進 より保護者との連携を密にして、家庭との協力による事故の未然防止 学校と警察の連絡制度の活用及び連携・並木交番への行事への協力要請 日常から生徒の行動を観察し、小さな変化にも対応して更に未然防止を図る。 特に雨天時の登校時指導を継続的に実施し交通安全、事故未然防止。つくば・荒川沖駅の立哨指導を計画的に実施を図る。 定期的に講習会を開催し交通安全の意識を高揚。特に自転車の安全運転指導も実技を交えて実施 今後業者とも連携して定期的実施
		自主的に「挨拶をする・装を正す・時間を守る」が出来るよう努める。	B	
		マナーアップ活動を通して、校則を遵守する態度の育成を目指す。	A	
	保護者・関係諸機関との連携を密にし、問題行動の未然防止を目指す。	保護者との連携・協力を密にする。	A	
		各中学校・警察等の関係諸機関との連携・協力を図る。	A	
		生徒事故の未然防止に努める。	A	
	安全教育の推進を図り、自己防衛意識・自己管理の育成を目指す。	登下校時の立哨指導・巡回指導を計画的に実施する。	A	
		交通安全教育の徹底を図る。	A	
		定期的に自転車点検を実施する。	B	
(教育相談)	心の問題を抱えている生徒の早期発見と早期対応を図る。	年次と情報を共有し、休みがちな生徒に対して、チーム支援の充実を図る。	A	A ・カウンセリングの件数が多い。(今年度のカウンセラーの派遣は他校が減少しているなか本校は特別の配慮によるもの)来年度が心配。回数を規制する必要がある。 ・前期不登校傾向の生徒の現状(保健室利用等)について全職員で危機感を持って取り組むべきである。対応(学習・成績)に関して多面的に話し合うことが必要。家庭との関わりについても共有すべきである。
		校内研修会を実施し、不登校マニュアルや相談室便りを発行する。	A	
	年次・保護者との連携強化を図る。	生徒へのアプローチについて教育相談的視点からのアドバイスをする。	A	
		保護者との連携を密にする。また場合によっては医療機関等の紹介をする。	A	
	スクールカウンセラー(SC)の積極的活用を図る。	カウンセリングを受ける生徒に対して、学校生活の中で支援を図る。	A	
		カウンセリングにおいて、SCと年次・担任等の間の連絡調整を支援する。	A	
(保健安全)	生徒の健康・安全・健康教育の推進に努める。	健康診断は校医と相談し、合理的且つ円滑に行い、要治療者については早期治療を徹底する。	A	A ・各種検診が後期課程の選択授業時に検診が当たると連絡調整が難しい。 ・避難訓練時の注意事項(ハンカチの使用・ポケットに手を入れないなど)を生徒・職員共に徹底させる。 ・部活動の顧問・副顧問・希望生徒に参加していただいた救急救命講習については来年度も継続で進める。本校はWRもあることからできるだけ多くの教員が講習をうけて、「万が一」の事態に備える。
		日常的な保健室利用生徒について、年次・担任・保護者との緊密な連携を図る。	A	
	校舎内外の美化と安全を図る。	年次縦割りの清掃班による清掃活動の充実化を図る。	A	
		ワックスがけおよび清掃強化週間を実施し、校内の美化に努める。	A	
		危険箇所の点検を行ない、改善・修繕に努力する。	A	
		災害時等の対応マニュアルの見直しを行い、全職員に周知徹底する。	A	
		避難訓練を年2回実施する。訓練に際しては、地域との連携を図る。	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題		
(食育)	正しい食事のあり方や望ましい食習慣を身につけ、食に感謝し、楽しく食事ができるようにする。	全職員の共通理解のもと、安全と食育指導上、適切な指示をしながら給食指導を行う。	A	A	担任のみならず年次全体で食育指導を継続・偏食・小食の生徒への継続的な指導		
		給食係や給食委員会による常時活動の活性化を図り、給食の円滑な配膳や片付けを行えるようにする。	A		給食係や給食委員会による常時活動の活性化		
		職員も教室で生徒とともに一緒に給食を食べながら、適宜、食事のマナーの指導、栄養や食文化の理解、望ましい人間関係の育成を図る。	A		給食指導を通して生徒とのコミュニケーションを深めクラス経営を円滑化		
4 特別活動部	部活動の活発化	中等前期・後期課程の生徒を含めた中高6年間一貫の活動方法を、前年度に引き続き模索する。	B	A	前期課程、後期課程での合同練習を実施している部活動もあるが、ルールや場所の問題が障壁になっている。		
		部活動における質の高い活動を推進し、個の育成と集団のレベルアップを図る。	B		活動時間が短いため引き続き、質の高い活動方法を模索する。		
		部顧問の適切な配置を考え、学校全体としての指導体制をより充実させる。	A		主顧問と副顧問の連携を充実させる。		
	主体性のある生徒会活動の推進	生徒会役員が、主体性を持って生徒会活動を進められるようにする。	A		定期的に生徒会を開き、一般生徒からの意見をまめ、精査する。		
		中等前期・後期課程の生徒を含めた生徒会活動のあり方を、前年度に引き続き模索する。	A		縦割りの生徒会活動を充実させるための方策を模索する。		
		生徒会役員選挙に多くの候補者が立候補するよう生徒の意識を高揚させる。	A		各年次担任にも協力を要請し、意識の高揚を図る。		
	学校行事の活性化	かえで祭の実行委員を適正数にし、生徒による質の高い企画・運営力の向上を目指す。	B		今年度は実行委員が多すぎて潤滑な活動に支障を来したため、来年度は適正数を考えた方がよい。		
		前期・後期課程の生徒が一体化したかえで祭を作り出す。	A		各年次の特色を活かし、より一層、充実したかえで祭を作り上げる。		
		前期・後期課程の生徒が主体的に企画運営し、スポーツデイを成功に導く。	A		縦割りによる種目を導入するため、生徒の意識改革を模索する。		
		WRの実行委員を増やし、生徒による企画・運営力の向上をめざす。	A		道路事情の変化により危険な箇所も増えているので、実行委員の安全意識を向上させる。		
	ウォークラリー(WR)を通じた心身の健全な育成と 集団意識の高揚	体育授業での歩行練習で規範意識や生徒の体力の増進に努める。	A		WR本番の天候や道路事情を考えた歩行練習、規範意識の高揚を図る。		
		生徒自ら集団歩行・行動の大切さを身につけ、お互い協力して歩行できるよう促す。	A		安全意識を高め、お互いに注意し合えるような、意識の高揚を図る。		
		上級生から下級生まで全校生徒が一つになり行事の成功に向かうよう働きかける。	B		後期課程の規範意識を引き締め、安全で一体感のあるWRを作り上げる。		
	5 学習進路部 (進路指導)	6年間を見通したキャリア教育を促進し、生徒が可能性に挑戦する進学指導を実践する。	年次に合わせた進路行事の体験を通して職業観や進路意識を高める。		A	A	PDCAにより効果的に実施
			進路だより・進学要覧の発行および進学ガイダンス等により、生徒への啓発と保護者への情報提供を行う。		A		PDCAにより効果的に実施
個人面談の充実により生徒に高い志と進路目標を持たせ学習時間の向上も図る。後期課程では土曜学習会を実施する。			A	PDCAにより効果的に実施			
模試学力分析会・進路研修会・学習状況調査により生徒情報を共有し、面談力の向上を図る。			A	PDCAにより効果的に実施			
実力テストに代わる並木検定の次年度からの導入を検討し、3・4年次生の学習指導の改善を図る。				PDCAにより効果的に実施			

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題	
(授業研究)	教員の学習指導力のレベルアップを図る。	毎月の授業参観(ちょっと見週間)を実施する。ちょっと見に連動してアクティブ・ラーニングやICT、TO授業をとり入れた授業公開を実施する。	A	A	継続実施する。
		教師向け研修会・外部教員研修参加の促進により学習指導力の向上を目指す。	A		継続実施する。
(学習環境)	学習環境を整備する。	ブライツホールの利用を促進する。	A		休日開館を外部委託とする。
		赤本の充実を図る。	A		継続実施する。
(図書館運営)	図書館運営を充実させる。	図書の充実を図る。	A		継続実施する。
		図書室利用の促進を図る。	A	継続実施する。	
6 PCシステム	IT機器を整備する。(特にハード面)	ハードウェアを整備する。特に、現状、有効に活用されていない機械類を、ネットワークを利用して共有することで活用を図る。(ファイルサーバーの活用など)	A	A	8月の教室PCリース更新をスムーズに行う。
		ネットワークの整備を計画する。PC室、LL室、教室、iPad等どこにいても同じ作業ができるような環境の構築を目指す。特に、体育館へのネットワークの敷設を検討する。	A		予備のファイルサーバーの運用を目指す。
	ホームページの再構築	年数を重ねて、無計画に肥大したホームページの構成を見直す。管理職、広報担当の教職員と内容や構成について検討し、どの情報を誰が知りたいのかを整理する。	B		「進路」の更新を促す。
	校務運営部、企画研究部との連携	知識や機械の活用を、他の校務分掌との連携を図ることで、より効果的なものとする。 ※緊急連絡網づくり、校内LANを用いた放送配信など	A		成績管理について校務運営部教務と打ち合わせ。
7 学校事務	教育環境及び生徒の学校生活環境の充実	授業研究が円滑に行われる様、必要な設備・備品を整える。	B	B	・教職員への早期要求の働きかけ
		生徒が安心して学校生活を送るため、学校施設の整備に努める。特に施設の老朽化により不具合の箇所については、早急に対応する。			・校内安全点検結果の対応・施設、設備、備品等の状況を随時直接確認し対応(予算的配慮)
8 1年次	学習や生活の基礎を固めるため、様々な経験を通して、生活リズムをセルフマネジメントできる生徒の育成	教科間の連携を図り、課題に対する「明確な量」と「的確な質」を保証した丁寧な学習指導を行う。	B	B	教科間で話し合う頻度を高めた課題の提示
		フォーサイトを活用し、見通しをもって自主的に学習に取り組む態度を育成すると共に、時間を有効に使用できるよう助言・指導を行う。	B		個に応じた学習プランの立て方等の指導・支援の充実
	礼儀正しい態度を身につけるため、集団生活を通して、協力や感謝の心をもつ生徒の育成	元気に挨拶をすることを意識し、爽やかで和やかな雰囲気と人間関係の構築に一人一人が寄与できるようにすると共に、規律ある生活に心がけることができるようにする。	B		善行を継続することの大切さの定期的な指導・声かけ
		道徳の授業を通して、公共心やいじめを許さない心など、よりよい集団生活のためにできることを一人一人が意識できる態度を醸成する。	A		道徳の授業の展開の充実と均質な授業内容の保障
文武両道に励む心を育てるため、高い目標をもって積極的に諸活動に取り組むことのできる生徒の育成	課外活動の時間の生徒の動きを明確化し、自主的に選択した諸活動に意欲的に取り組むことができるようにする。	A	B	放課後学習の支援の在り方(実施日や個に応じた指導)の再考	
	教育相談の充実を努め、定期的な面談や懇談、それ以外の時間でも生徒や保護者との連携を図り、価値観の相違や人間関係の複雑化にも対応できるたくましい精神の育成に努める。	B		年次レベルでの定期的な教育相談の実施	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題		
8 2年次	強い意志と高い志をもって、自分磨きができる生徒の育成	総合的な学習の時間での個々の研究や職業調べ、職場訪問など様々な体験から、将来の適性を見出し、自分の将来の夢や希望を意識し、実現にむけて行動する力を育成する。	B	A 職業に関する探究をもう少し時間をかけてやれるとよかった。 フォーサイトは活用できている生徒が多い。家庭学習調査を重ねる中で、学習時間の確保の次のステップとして、学習の質の向上を図る必要がある。 年次朝会や年次行事で生徒企画を取り入れたことをもとに、来年度はどんな活動が必要か、生徒と共に考えていく。 自分と向き合い、ありのままの自分を受け入れる力を付けていく必要がある。 中学の集大成となる総体に向けて、目標をもって部活動に参加させていく。 これまでの活動経験から、今後は指示ではなく、ゴールを示して過程を考えさせる活動を重ねる。 友達との意見交換を大変楽しめている。課題解決のみでなく、相互理解に繋がるALを展開していく。 R80だけでなく、哲学的思考を鍛える場を多く設け、考える場を確保していく。		
		目標をもち、見通しをもって学習・行動するためにフォーサイト手帳を有効活用する方法を指導し、コメントを充実させる。また、定期的に家庭学習時間調査も実施して、生徒の様子を数値的にも掌握し、指導に活かす。	A			
	感謝の気持ちをもち、仲間と共に伸びる生徒の育成	学校行事や年次朝会、年次行事などを生徒自らが企画・運営したり、個性を發揮し活動したりできる場を設け、自発的な活動を支援する。また、仲間がいるからこそ生まれる達成感や感動を体験させる。	A			
		自律を意識させ、これまでの自分を見つめ、今の自分と向き合い、将来の自分を描けるような活動を組み、自分を支えてくれている環境や人に感謝の気持ちをもてるような場を設ける。	B			
		部活動の中心的な立場としての意識を高めさせ、積極的な参加を促す。	A			
	よりよき考え方や方法を生み出しながら、自律する生徒の育成	中高一貫における基礎期における土台を固め、指示がなくとも考えて動かさなければならぬ場を日常に多く設け、充実期に向かわせる自律を促す。	A			
		アクティブ・ラーニングを通して、自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりする場面を多く設定し、生徒が自ら考え主体的に活動できる授業を展開していく。	A			
		R80を活用し、学びや自己の振り返りから、思考の再構築の習慣をつけさせ、考える面白さを体験させる。	A			
	9 3年次	「論理力」など21世紀型能力をもった生徒を育成する。	「アクティブ・ラーニング」を通して、自分の考えを伝えたり、友の意見を聞いたりする場面を多く設定し、自ら考え積極的に生徒が活動できる授業を積極的に行う。		A	A 新テストを意識した読解力を元に、自分の考えを論理的に発表する力の育成 教員によるフィールド調査場所の交渉に時間がかかり負担となった。 行事が重なってしまったため、教員の負担感が大きくなってしまった。仕事が重ならない工夫が必要 筑波大の他に茨城大学を入れ内容が充実した。千葉大学などの検討も必要 学校全体が挨拶で活気に満ちた雰囲気をつくり出す工夫や取り組みが必要 手帳の回収率が悪いクラスがあった。全クラスが全員提出できるようにしたい。 さらに生徒が企画し、運営する行事や活動を増やしていきたい。 夏前まで部活動に取り組んだが、その後引退したり、やめたりした生徒がいた。継続させる必要有り。
			総合的な学習の時間や年次行事において、ICTを積極的に活用したり、効果的活用を工夫したりして、生徒の思考力・判断力・表現力等の能力を育てる。		A	
急速に変化している日本や世界に役に立とうとする強い使命感をもった生徒を育成する。		大学見学、広島京都平和研修、出前授業、講演会などの体験活動を充実させ、4年後を見通した発達段階にあったキャリア教育を展開する。	A			
		総合的な学習の時間でのグループ研究や学部学科調べ、講演会、筑波大見学などを綿密に計画・実施する。それらの実践を通して、将来の夢や希望を意識し、進路実現にむけて努力する力を育成する。	A			
当たり前のことが当たり前に見える生徒の育成		元氣な挨拶のできるように日頃から指導を行う。さらに学校の決まりや、公共のマナーなどに対する意識を高める声かけを行い、実践・振り返りする活動を取り入れる。	B			
		課題の提出期限などを守り、見通しをもって行動できるように、フォーサイト手帳を有効活用する方法を指導し、支援を行う。	B			
感謝の心をもち、仲間と切磋琢磨できる生徒の育成		学校行事や年次行事、学級活動などを生徒自らが企画・運営したり、個性を發揮し活動したりできる場を設ける。	A			
		部活動の中心的な立場としての意識を高めさせ、積極的な参加を促す。	A			

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
10 4年次	基本的な生活習慣の育成	挨拶を励行し、服装指導、清掃指導を徹底する。	A	A 次年度も継続する。 次年度も継続する。クラスの色をいかしつつ、より共通理解をとる必要がある。 個人差があるので、個々に対応しつつ、全体とのバランスも見ていく必要がある。 各職員の特徴をいかした実践ができた。来年度も継続する。 授業力の向上とテスト問題のレベルアップを図る。 今年度の状況を継続する。 手帳の提出状況が芳しくない生徒や学習時間の少ない生徒に学習の必要性を伝える。 今年度の状況を継続する。 次年度も継続する。クラスの色をいかしつつ、より共通理解をとる必要がある。 次年度も継続する。
		SHRでの指導を重視し、遅刻をさせないとともに、話をしっかりと聞く姿勢を作る。	A	
		長欠生徒、問題生徒に対して、善後策と問題解決に努める。	A	
		道徳の授業を年次職員がローテーションして行うことで、心を多面的に養う。	A	
	学習の習慣化と基礎学力の育成	大学共通テストへの対応もできるように、思考力を高める授業スタイルを積極的に導入し、応用・発展へと広がりのある授業を展開する。国公立大学の二次試験に対応できる論理性・表現力を育成する。	A	
		朝の小テスト、週末課題、模試等の実施による学習の習慣化および学力向上を図る。	A	
		スコラ手帳を活用し、年次平均で平日2時間以上の学習時間を確保する。	A	
		進路講演会、大学見学会、卒業生との学習相談会等により、自己理解と進路意識の向上を図る。	A	
	自己理解と進路意識の高揚	個人面談を重視し、文理選択や難関大学への進学を早期に意識させる。また、LHR、総合的な学習の時間等を活用して、生徒全体かつ個々に対して進学に関するアドバイスや情報提供に努める。	A	
		蛍雪時代等の進路情報誌の興味関心を高め、自ら情報を収集する生徒を育成する。	A	
11 5年次	規律ある基本的な生活習慣の育成	家庭との連携を密にして、問題の発生を未然に防ぐ生活指導を徹底する。	A	A 次年度も継続 次年度も継続 次年度も継続 次年度も継続 受験向け課外の充実を図る。 次年度修学旅行への引継ぎをする。 生徒の希望する進路実現をめざす。
		生徒との面談を繰り返すことによって生徒理解や生徒の心の悩みを把握する。	A	
	生徒間、生徒と教員間の集団としての信頼関係の形成	発展期を迎え、クラスの団結と仲間意識の向上のためLHR活動を充実させる。	A	
		生徒との面談を年次職員全員で取り組むことによって一層の生徒理解を図る。	A	
	学習習慣と基礎学力の育成	「家庭学習の記録」表などを導入することによって家庭学習時間を確保する。	A	
		授業中心に心がけるとともに、課外を導入し、ひとつ上のレベルをめざす。	A	
	異文化理解と自己理解について考察を深める生徒の育成	台湾への修学旅行をとおして、異文化理解および異文化から自国の文化を再確認する。	A	
		最終年次に向けて、大学模擬授業や進路講演会をとおして自己理解を深め、進路意識の向上を図る。	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
12 6年次	規律と活力ある基本的生活習慣の完成	遅刻指導を継続することで、早めの登校時間を習慣づけ、学校生活にリズム感を持たせる。	A	A センター試験後に、遅刻する生徒が増えた点が課題と感じた。 スコラ手帳の利用をやめたため、アプリを利用した学習記録をする生徒が増えた。 ブライトホールの利用改善を継続したい。 大変良く面談を実施し、生徒の把握に努めることが出来た。 受験に対して集団として向かうことが出来た。 課外授業の充実には目を見張るものがあった。 かえで祭等の年度前半の行事でのリーダーシップ育成 先輩から後輩へ受け継がれる学風創造の意識向上徹底
		生活記録表の記入と提出を継続することで、生徒の状況理解を図り、生徒動向の把握に努める。	B	
	生徒間、生徒と教師間の信頼感を醸成し、集団としての凝集性を高める	主体的な学習集団を目指し、セルフスタディスペースやブライトホールの活用を促し、お互いに切磋琢磨する雰囲気の醸成に努める。	A	
		担任面談・副担任面談・年次主任面談を継続して行い、生徒と教員間の意思疎通を密にし、生徒をタイミングよく支える体制を作る。また、面談情報の共有を図る。	A	
	志高い進路意識の維持による進路実現	学年集会や進路講演会での講話をとおして、生徒の第一志望への意欲を維持させる。また、チーム並木として、集団で受験に向かう環境を作る。	A	
		LHRや総合的な学習の時間においては、将来への目標確認を行うことで、自らのキャリア観を意識させ、課外学習においては、質の高い学力の向上を図る。	A	
	最上級生としての自覚により、下級生に範を垂れる	年度前半の学校行事や部活動に悔いなく取り組みさせることで、最上級生としてのリーダーシップを発揮させる。	A	
縦割り活動をとおして、最上級生としての振る舞いを自覚させることで、並木中等の学風をつくる覚悟を促す。		B		
13 国語科	基本的な学習習慣の定着	学習ガイダンスを重視し、こまめに行うことで、学習の見通しを持たせ、計画的に学習しようとする態度を育てると共に、予習・復習の学習習慣を身につけさせる。	B	A 学習ガイダンスを年度始めだけでなく、試験前や行事後等、効果的に行う必要がある。 TO学習での異学年間の交流は生徒の意欲向上につながるため、今後も実施していきたい。 発達段階に合わせた指導をしていく必要がある。 発達段階に合わせた指導をしていく必要がある。 5、6年次の難関大課外や添削指導を他の学年の教員も協力して行うことで、受験指導のあり方を共有していく必要がある。
		単元ごとに明確な到達目標を提示し、段階に合わせた授業計画と評価計画を提示する。	B	
	読解指導の深化	論理的文章・文学的文章の読解法について解説する中で、芸術論や科学論等幅広い分野の文章を客観的に読解できる力を育成する。	A	
		AL型授業展開をすることにより、他者との関わりの中での学び合いの機会を設けることで、読解力の向上を目指す。	A	
	「書くこと」の指導の徹底	「読むこと」や「聞くこと」と関連させながら、ノート指導を基本とし、書くことを通して思考をまとめる方法を学ばせるようにする。	A	
		各年次に合わせた添削指導を行うことにより、論理的文章表現力の向上を図る。	A	
	「聞く」態度の育成と適切な話し方の指導	正しく内容を理解するために、状況に応じて「聞く」、「聴く」、「訊く」の3種類の「きく」を使い分けられる生徒を育てる。メモを活用した聞き方についても指導を行う。	A	
		場と内容に応じ、聞き手を意識した「話し方」を工夫しようとする態度を育てる。	A	
	研修機会の充実	研修会等に積極的に参加して、授業作りの参考になる情報を集めて活用する。	A	
		定期的な教科会を開くと共に、互見授業を行うことで年次進行に合わせた授業法の研究を行い、新たな指導法の構築を図る。	A	
他教科の授業を積極的に参観し、指導法の工夫を取り入れる。		A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
14 社会科	6年間を見通した教科指導体制を構築すると共に、各時期において身につけるべき能力を明確に定めて授業実践を行う。	シラバスを活用し、観点別学習状況評価を円滑に実施すると共に、各年次での学習目標を明確に提示した上で実践を行う。	A	学習目標の見直し 前期において、後期の学習内容との関連をより意識した実践を行う。
		生徒の発達段階に応じた学習内容と方法を検討し、実践に生かす。 ・基礎期(中1～2) 学習内容を精選し、言語活動を積極的に導入する。 ・充実期(中3～4) 効果的な先取り学習や教科横断型授業の研究を進める。 ・発展期(中5～6) 進路実現に必要な学力を養成する。 多様な進路希望に対応できる科目選択の在り方を研究する。	A	
	生徒主体の授業の展開を常に意識し、学習意欲を喚起するための指導法の工夫と改善を図る。	「アクティブ・ラーニング」を積極的に取り入れた授業を実践する。 ・教科会での話し合いを生かしながら能動的な学習につなげられるような学習課題や発問の開発を継続する。 ・ICTを積極的に活用することで、課題探究に対する意欲を高めると共に、思考力や表現力の育成を図る。 ・R80を活用して、自身の考えを論理的に記述したり表現したりするなど、言語活動の充実を図る。 ・TO学習を取り入れ、学習成果の確認や課題の克服を生徒同士で行うことにより、学習意欲を高めると共に、学びの中から豊かな人間性を育む。	A	さらなるアクティブ・ラーニング実践の可能性を追求する。 小テストや課外の内容や方法を見直し、より効果的な実践を追求する。
		自ら学ぶ生徒を養成するための工夫 ・課題提出や小テスト、家庭学習を充実させることにより基礎的・基本的な知識や技能の習得を図る。 ・課外授業や添削活動・模擬試験を有効活用する。	A	
15 数学科	基礎・基本の定着とともに、論理力を高め、応用力の育成	生徒が考えればわかる、やれば解けると思えるように、アクティブ・ラーニングを踏まえた授業展開やICTを活用した説明方法を工夫する。	A	6年間の指導のあり方の確立と新テストに向けての対策 TO学習を行う機会の増加 学年ごと課題を精選し提示する。小テストの実施 学年担当者間で意見交換をする時間の十分な確保 入試問題や添削等、学習進度に合わせて提示 クロスカリキュラム授業の計画と開発 到達度に応じた課題の提示、視覚教材の利用 教員のICTに関するスキルアップ 少人数・習熟度授業の実施 課外や追試、補習授業の実施
		年に何度かTO学習を実施し、下級生に教える経験を通して、基礎・基本の重要性を見直し、またその理解を深める。	B	
		定期的に課題を与え、家庭学習と充実させ、基礎・基本の定着を図る。	A	
		定期テスト、実力テストの問題検討に十分時間をとり、基礎・基本の定着、論理力、応用力の育成までを目的とした問題を作成し、出題する。	A	
		生徒の学力に応じて学習内容を精選し、深化的・発展的な内容の学習も行う。	A	
	学習意欲を喚起する指導の工夫	SSHの取り組みを踏まえ、他教科と協力して教科横断型の授業などの数学的活動の充実を図り、探究力・論理力の育成を目指す。	B	
		課題や課題提示の仕方を工夫し、生徒たちの知的好奇心を喚起する。	A	
		ICTを積極的に活用し、数学的な思考力・表現力の育成を目指す。	A	
	生徒の能力差をふまえ、個に応じた指導	きめ細かな指導をするため、習熟度別学習・少人数学習を工夫改善する。	A	
		生徒の実態を把握し、個に応じた助言・指導が行えるようにする。	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題	
16 理科	基礎力の定着, 学力の向上	オリジナルプリントや小テストなどを活用して, 時間を効率的に使い, 演習時間などを多くとり, 基礎学力の徹底を図る。	A	A	必要などきに誰もが使うことのできるように教材をデジタル化する。
		アクティブ・ラーニングやICT活用, TO学習等により生徒の主体的学習態度の育成を図る。	B		発達段階を意識した活用を計画していく。
	SSH第2期目の推進のため, つくばという立地を生かした授業研究	つくばの研究所や施設を利用した地域との連携, 筑波大学などとの高大連携により, 生徒の探究力・論理力の育成を図る	A		さらに広大連携を推進していく。
		ICTや外部講師を活用した出前授業等を研究する。	A		各年次における出前授業を体系化する。
	6年間の系統的なカリキュラムを実践・修正	SSHで開発してきたSS科目により, 高校教科書の一部を先取りして学習し, スパイラルをいかしたカリキュラムを実践し, 前期から後期への接続の体系化を図る。	A		全教員でさらに情報交換を積極的に行う。
		同じ科目を教える教科担当同士が密に連絡を取り合い, スムーズに接続できるようにする。	A		全教員でさらに情報交換を積極的に行う。
生徒の学力を向上させ, 探究の過程を学ぶ効果的な学習法・指導法の開発	アクティブ・ラーニングやICT, TO学習等を取り入れた授業を相互に参観し, その指導法を教科会で共有することにより指導力の向上を図る。	B	授業相互参観での内容を教科会でさらに共有し指導力向上を図る。		
17 英語科	総合的なコミュニケーション能力の育成	言語の使用場面を考え, 4技能のバランスのとれた言語活動を行い, オーセンティックな題材や視聴覚教材を取り入れた授業を展開する。	B	A	・それぞれの技能のバランスに配慮する。
		授業導入時や展開時における日常会話や音声表現活動(自己表現活動)を実施する。	A		・実践的なコミュニケーションを意識する。
	基本的な英語力の構築	自主学习ノートの定期的な提出やこまめな小テストの実施・評価と共に, 効果的に生徒へフィードバックする。	B		・効果的な宿題の出し方や, 小テストの工夫。自学ノートの取り組みが作業ではなく, より学びにつながるよう改善。
		辞書の活用を奨励し, 語彙を増やすことを目的とした諸活動を実施する。	A		・導入時における辞書指導。
	英語を用いた言語活動を積極的に進める力の育成	プレゼンテーションやディベート活動といった発展的な言語活動を通して, 自分の意見をきちんと英語で表現できる力を養う。	A		・前期課程はスモールトーク, 後期課程はディベートを念頭に指導する。
		教科書だけでなく様々な補助資料を用いて異文化理解を進める。	A		・効果的な補助教材の選定。
	国際的な視野を広げる言語活動の構築	ALTや留学生とのコミュニケーション活動を通して, 様々な考えに触れる機会を設ける。	A		・ALTの効果的な活用。特に前期課程のALT参加は, 毎週か隔週かの検討が必要。
		インタラクティブフォーラムやスピーチコンテストなどに積極的に参加し, 意欲的に言語活動に取り組む機会を設ける。	A		・大会への参加を通して, より高度な英語力の育成を行う。
	6年間を見通した英語科としての指導形態の確立・発展	教科会や「ちよつと見週間」等を通して, 各年次における授業の検証と継承を行い, 並木英語科スタンダードを確立・発展させていく。	A		・常に6年間を意識した指導を行う。
		ディベート授業研究発表会の実施や公開授業等を通して, 本校での授業形態を外部に向けても発信し, 県内の英語教育のリーダー的役割を担っていく。	A		・授業公開を通して, 並木英語科スタンダードの継承と発展。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
18 芸術科(音楽)	基礎的な能力を養う	実技の中で基礎知識に触れ、わかりやすい説明を行い知識の定着を図る。	A	A 知識と技術習得のつながりを意識した授業展開 反復することで、技能と知識の定着化を意識した授業 鑑賞分野でのグループ活動を活性化する授業工夫 意図をもって意見交換するためのワークシート等の工夫 歴史や文学の視点から幅広く学べる授業の工夫 諸要素の意味と、楽曲や歴史背景等ともからめた視点から音楽を知る。 創作活動の時間の確保 意図をもってつくって表現する活動を展開
		反復練習を重視し、表現に必要な技能や能力を養う。	A	
	幅広い表現活動の充実	歌唱、器楽、鑑賞、創作それぞれの分野においてグループ学習を取り入れた活動を行う。	A	
		グループで意見交換の場を持ち、表現したいことを意識した活動を重視する。	A	
	鑑賞教育の充実	音楽のみでなく、時代、歴史等にもふれ、幅広い観点から鑑賞する能力を養う。	A	
		音楽の諸要素に着目し、それをういて何を表現しているのか考えることのできる視点を養う。	A	
	創作活動の充実	基礎知識を用いて簡単な創作を行い、作ってそれを意図をもって表現する活動を行う。	B	
		音楽の構成や進行に従って作曲を行い、発表活動を行う。	B	
19 芸術科(美術)	基本的な美術の能力を育成	体験活動を充実させ、美術の基礎知識を身につける。	A	A ・ICTを取り入れた視覚的授業とALを展開 ・混色カードを使用する意識 ・課題の規定を明確化 ・夏課題を利用して美術館鑑賞を行う。 ・作品完成後に振り返りをおこなう。 ・作品制作を通じて理解と関心を深める。 ・作品完成後に他者の作品の鑑賞 ・アイディアスケッチの段階でペアワーク等を用いる。 ・技術的な指導を絶やさず。机間指導
		色彩の効果を考えて構想を練り、材料や用具の生かし方を考え、工夫してあらわすことを意識づける	A	
	柔軟な表現活動を育成	豊富な知識や表現方法を能動的に活用する喜びを養う。	B	
		自他の価値観を認め、内面的なイメージを豊かに表現する力を持って表現活動する。	A	
	鑑賞活動の充実	自国の美術文化の特徴を理解し、優れた伝統美術に関心を持つ。	A	
		作品や作家の言葉から美術の多様性に気づき、自分の表現に生かそうとする態度を養う。	A	
	美的体験を日常生活に生かす	実生活に活用できるような、情報やイメージを効果的に伝えるデザインする力を育てる。	A	
		絵画や彫刻・工芸などを暮らしに役立てる感覚を身につける。	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
20 保健体育科	体力を高め、心身の調和的発達を図る。	授業及び体力テスト等への積極的参加姿勢を育成する。	A	A 体力テスト上位者を表彰、後期生では種目選択を導入 体づくり運動で体力を高める運動の取り組み強化と、各種目の準備運動時に補強運動の導入 体力テストの結果を基に、自己の状況を把握させる。 個々の能力に応じた運動で楽しめるルール作り 前期生から多くの種目を経験させ、指導も教員の専門種目を生かした担当制を導入 段階的な指導を継続し、ルールの定着を図る。 4月の授業時に全学年、集団行動を徹底して指導し年度のスタートをきる。 授業開始・終了、ゲーム開始・終了時における挨拶の徹底 常に声かけを行い、フェアプレー精神を常に意識させる。 心身関連の理解 ICT機器の活用や実習により、生徒の能動的な学習に結び付ける。 各自の生活習慣や食習慣を改善し、規則正しい生活習慣を身に付けさせる。
		体づくり運動の効果的な実践を行う。	A	
		自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育てる。	A	
	運動を豊かに実践することができるようにする。	運動の合理的な実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	A	
		幅広い基礎運動技能を修得させる。	A	
		ルールを理解させる。	A	
	スポーツマンシップの育成	規律ある行動をとる。	A	
		あいさつを励行する。	B	
		マナー、ルールを遵守させる。	A	
	保健学習の充実	心身の発達と心の健康について理解させる。	A	
		健康と環境、障害の防止について理解させる。	A	
		健康な生活と病気の予防について理解させる。	A	
21 技術・家庭科における技術分野	生徒の学習意欲を喚起する学習指導	他教科との関連を意識した授業展開から、生徒の知的好奇心を喚起する。	A	A ミニ探究が行えるよう技術指導を積極的に行う。 アートアクティブ・ラーニングを意識した授業を行う。 コミュニケーション力の涵養も意識する。 効果的な宿題の出し方を工夫する。 今年度の状況を継続する。 今年度の状況を継続する。
		グループ活動を取り入れ、自主性や協調性を伸ばすとともに、楽しい授業の実施を工夫する。	A	
	科学的な理解と技術の習得	実習などの体験的な活動を通して、基本的な技術を習得する。	A	
		ワークシートや学習ノートを活用し、学習内容の定着を図る。	A	
	生活に生かす力の育成	生活の場面で生徒が取り組めることを意識した授業を展開する。	A	
		ワークシートや実習を通して、生活の場面を想定できるよう授業を展開する	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
22 家庭科	生徒の学習意欲を喚起する学習指導	生徒の興味・関心に応じ、知的好奇心を喚起する学習内容を工夫する。	A	A 科学的根拠や社会的・文化的背景なども取り扱う。 安全面に配慮する。 コミュニケーション力の涵養を意識する。 理科との関連から、科学的な理解を図る。 技術テスト等を取り入れ、技術力を高める。 長期休暇中に具体的に実践できるような課題を与える。
		実験や実習を効果的にを行い、体験的に学べるようにする。	A	
		グループ活動を取り入れ、自主性や協調性を伸ばすとともに、楽しい授業の実施を工夫する。	A	
	科学的な理解と技術の習得	生活を科学的にとらえる授業を展開する。	A	
		基礎的・基本的な技術を習得できるような実習を行う。	A	
	生活の場での実践力の育成	生活の中で、学んだことを生かす態度を育てる。	A	
23 情報科	ICT活用及びコミュニケーション能力の育成	実習の中で基本的なビジネス用ソフトウェアを利用する。	B	A ソフトウェアの不具合があり、より適切なソフトウェアを探す。 現行通りで問題なし。 グループワークの機会を増やす。 現行通りで問題なし。 現行通りで問題なし。 現行通りで問題なし。 現行通りで問題なし。 現行通りで問題なし。
		情報の検索、加工、発信という基本的なICT活用プロセスを扱う。	A	
		グループワークや他とのコミュニケーションを重視した実習を行う。	B	
	情報倫理の育成	知的財産権について、いろいろな場面で扱う。	A	
		情報倫理について、自分で判断できるように指導する。	A	
		情報モラルを重視した指導を行う。	A	
	他教科や外部組織との連携	学校行事・課題探究とリンクした実習を取り入れる。	A	
		他教科や外部組織との連携をいろいろな場面で試みる。	A	
24 道徳	望ましい生活態度を身につけ、互いの個性を尊重し、自主的・自律的に行動しようとする態度を育成する。	年次や学級の生徒の状況を把握した上でその実態に応じた題材を提示することに努める。	A	A 題材の精選 講演の際の生徒への意識づけ 意見の集約方法の工夫 自己の行動を振り返る機会の設定
		道徳の授業の中で考えたことが、学校生活のよりよい人間関係の構築や円滑な生活の維持に生かせることが実感できるようにする。	A	
		「道徳」「道徳プラス」の授業において、学級やグループ内で意見交換や話し合いの場を設け、他者の意見を基に自己の考えを深化できるようにする。	A	
		授業で考えたことを、従前の自己の生活や考え方と比較し、今後の生き方に反映できるようにまとめさせる。	A	
25 学級活動	学校全体や、各年次、各クラスで、生徒主体の活動の促進を図る。	生徒会主催の全校集会や、生徒主体の年次集会を開催し、生徒自らが積極的に企画運営できる能力を育てる。	A	A 年間を通して生徒主体の年次集会の実施を図る。 継続して実施する。 集団の中での自分の役割を自覚させ自ら動ける行動力を育てる。
		学級での一人一役の実践と工夫を図る。	A	
	集団や社会の一員として望ましい人間関係を構築し、よりよい生活環境を築こうとする態度や自己を生かす力を養う。	校外学習等において、生徒主体の企画・運営をする能力を育てるとともに、集団の一員として望ましい人間関係を構築できる能力を培う。	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
26 総合的な学習の 時間	自分の興味あることについてのテーマを設定し、そのテーマに基づいて調べ学習を展開することで、情報収集能力や情報活用能力、考察力、プレゼン力を育成する。	「かえでツーリスト」というテーマのもと、自分の住んでいる地域を実際に歩いたり、調べたりなどして、地域再発見の機会を設け、情報収集能力や情報活用能力、プレゼンテーション能力(発表資料作成)を育成する。(1年)	A	A ・内容の精選を意識し、短時間でも上質な作品づくりと、そこから学んだことをフィードバックできる機会を設定する。 ・テーマの範囲を広げ、生徒一人一人がより関心をもって調べられるよう、その設定について再考する。 フィールドワーク等も含め、探究の一連の流れを学んだことで、課題探究に繋がる力を身につけることができた。 職業について調べ、自分の将来を考えるきっかけとなったが、もう少し充実させられるよう、時間を確保したい。 活動としてしっかり行うことが出来たが、それが学習意欲に結びつかなかったことが課題である。 計画的に良くできたが、フィールドワーク場所の調整が大変で教員の負担となった。
		「ミニ課題探究Ⅰ」において、世界の社会問題について調べ、テーマ設定能力や調べる力、調べたことから考察する力、プレゼンテーション能力(スライド作成)を育成する。(1年)	A	
	テーマを追究し、課題を解決する課程において、課題発見能力、課題解決能力を育成する。また、自分の将来の夢や職業を意識し、進路実現にむけて行動する力を育成する。	つくばサイエンスフロントで科学に対する興味・関心をさらにもたせる。ミニ課題探究Ⅱにおいて、「身近な疑問を解決する」というテーマのもと、フィールドワークや実験・観察などを行う。研究論文やポスターの作成を通して、テーマ設定能力や探究の過程の手法を学び、分析力や表現力、論理力を育成する。(2年)	A	
		「キツザニアかえで～将来の職業について考えよう～」というテーマのもと、自分に適した職業を知る活動や職業調べ、キャリアアトラクションの企画立案・実践を通して、自分の将来の夢や希望を意識し、実現にむけて行動する力を育成する。(2年)	A	
	課題研究を通して、グループで学び合う力、テーマ設定能力、データを分析・考察する力を育成する。また、自分の将来や卒業後の進路に向けて行動する力を育成する。	「かえでユニバーシティ～卒業後の進路について考えよう～」というテーマのもと、大学の学部・学科を調べる活動や文化祭におけるキャリアアトラクションの企画立案・実践を通して、自分の将来や卒業後の進路に向けて行動する力を育成する。(3年)	A	
		「ミニ課題研究Ⅲ～地域の社会問題を解決しよう～」というテーマのもと、インタビュー、体験活動、フィールドワークやレポート作成を通して、グループで学び合う力、テーマ設定能力、データを分析・考察する力を育成する。(3年)	A	
	6カ年教育における諸活動をとおして、自らの生きる道を、主体性をもって選択し決断できる能力を育成する。	大学出前授業、進路講演会、文理選択説明会、大学見学会、卒業生との学習相談会などの進路学習を充実させ、進路に対する視野の拡張と難関大学への意識を高める。(4年)	A	
		道徳の授業を通して、職業観や生き方に対する意識を高める。(4年)	A	
		「異文化理解と自己理解」というテーマで、台湾への修学旅行をとおして異文化理解と異文化から自国の文化を再確認する。(5年)	A	
		自己の進路について、多方面から情報を集めることで具体的な進路を見いだせるよう一助、そして、最終年次に向けて意欲の向上を図り、進路実現を目指す。(5年)	A	
		「進路実現と主体的な生き方の模索」というテーマで、進路情報の収集を進める一方、進路講演会などとおして、その都度自己を見つめ直す機会も設ける。(6年)	A	
		並木中等での6年間の総括をすべく、時期により作文やレポート作成を行い、振り返りと将来への展望を促す。(6年)	A	

※ 評価規準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない